



NEWSLETTER

～ 水を守り 湖を救う ～

公益財団法人 国際湖沼環境委員会(ILEC)^{アイレック}
本ニュースレターには、英語版もございます。

第15回世界湖沼会議ハイライト



2014年9月1～5日に、第15回世界湖沼会議（WLC15 - 湖沼は地球の鏡：生態系と人間活動の健やかな調和に向けて）がイタリア中部の都市、ペルージャで開催されました。45ヶ国より研究者だけでなく政府/民間企業/NGO関係者、芸術家、学生、児童等800人近くが参加し、科学とマネジメント双方の観点から湖沼とそれを取りまく生態系システムや人間活動についての議論と見識を深めました。初日の開会式では、現地運営委員会のLucio Ubertini委員長による開会の辞に始まり、三日月大造滋賀県知事、浜中裕徳ILEC理事長ほかイタリア国内外からの来賓挨拶が行われ、今回の世界湖沼会議が30周年を迎える記念すべき節目である旨が述べられました。続いてユネスコ水教育研究所(UNESCO-IHE)所長のAndrás Szöllösi-Nagy教授*が基

調講演を行い、人類の持続可能性を見据えた水資源の持続可能なマネジメントについて訴えました。

8つの主要テーマのもと、生物学的課題やガバナンスの問題から文化的側面における議論に至るまで幅広く扱った、30以上の分科会とワークショップが連日開催されました。なかでも「ハートウェア」の分科会は、世界湖沼会議で初めて湖沼とその流域の宗教的、文化的、伝統的価値における人間と自然の関わりについて単独で取り上げたこともあり、出席者やメディアの注目を集めました。また、ILECが推進する統合的湖沼流域管理（ILBM）を主題にした分科会では、地元トラジメノ湖をはじめ世界各国からILBMの最新活動事例が発表されました。これらの分科会に加え、国際政策フォーラム、地域政策フォーラム、TWAP公開フォーラム等のサイドイベントも開催されました。これらのフォーラムの概要は次ページ以降に掲載しています。

ペルージャの歴史的なたたずまいが残る中心地区の随所では、さまざまなビジュアルイベントが開かれました。メイン会場でのポスターセッションや産業展示に加え、会議のテーマに関連した芸術作品と写真の展覧会や、科学についてわかりや

すく説明した教育展示が9月末まで催され、市民や観光客にも多数入場いただきました。また、会期中はトラジメノ湖やマルモーレの滝へのテクニカル・フィールドトリップとコルバーラ湖での晩餐会が催され、出席者はペルージャ近郊の豊かな自然や歴史的な魅力を楽しみました。



5日間にわたるイベントの締めくくりはペルージャ宣言**——会議の主要な議論をまとめたメッセージが世界中の政策・意志決定者や湖沼利害関係者に向けて発せられました。次回の世界湖沼会議（WLC16）は、2016年にインドネシアのバリ島で予定されています。詳細は財団サイトにて随時お知らせいたします。最後になりましたが、WLC15主催のウンブリア科学ミーティング協会、ならびに会議開催に協力いただいた方々と参加いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。



* András Szöllösi-Nagy教授は2014年11月7日をもってUNESCO-IHEを退職されました。

** ペルージャ宣言の全文、その他本会議の成果物はこちらのサイトよりダウンロード可能です：www.ilec.or.jp/en/wlc/past/?p=2881

今号のトピック

- 第15回世界湖沼会議ハイライト
- 国際政策フォーラム
- トラジメノ湖と琵琶湖をつないだ地域政策フォーラム
- TWAP公開フォーラム
- 東アフリカとポストAFSAN ILBM
- 科学委員からのメッセージ（ブラジル）
- ILECの科学ジャーナル「Lakes & Reservoirs」第19巻

- 元JICA研修生からの便り（インド）
- 訃報：ILEC顧問（初代理事長）山崎圭氏 逝去
- ILECでのインターンシップを終えて
- ILECの活動が放送されました
- 浜中理事長が「瑞宝重光章」を受章
- ILECの活動概要（2014年7月～2015年3月）
- 寄付・賛助会員募集のご案内

国際政策フォーラム

国際政策フォーラムは、世界の湖沼や他の静水システムの管理におけるグローバルな課題や対策を議論するために開催されました。ユネスコ水教育研究所 (UNESCO-IHE) 所長のAndrás Szöllösi-Nagy教授*が議長を務め、6ヶ国、2つの国際機関からのスピーカーを含む20人以上が出席し、政策や法律上の問題、生態系サービスとその持続的な管理について討議しました。その中で従来の「ハードウェア」や「ソフトウェア」に加え、水のガバナンスにおいて歴史、文化、人間活動、さらには宗教的な価値を尊重する「ハートウェア」という新しい概念が初めて紹介されました。

ILEC科学委員会からも重要な意見が挙げられました。湖沼ガバナンスにおける市民社会の位置づけについて述べたイタリア人メンバーのLuigi Naselli-Flores教授は、越境水域がそれを所有する国家間のパートナーシップを築く上で担う役割が、今後さらに重要視されるべきであると訴えました。副委員長のWalter Rast教授は、現在主流となっている統合的水資源管理 (IWRM) の原則に基づいた水管理の議論では、

静水システム (湖沼、貯水池等) が流水システム (河川、運河等) との繋がりにおいて果たしている大きな役割が見落とされており、統合的湖沼流域管理 (ILBM) はこれを補うものであると指摘しました。さらに委員長の中村正久教授は、ILBMが湖沼流域ガバナンスの基礎となる文化や歴史的に醸成された共通の価値観を強化することにより、人間と湖沼・貯水池の管理の間の繋がりをつくりだしたと述べてこの議論を締めくくりました。

インド、インドネシア、イタリア、日本、ケニア、メキシコ、セネガルから出席したパネリストは上述の議論に賛同するとともに、現在、多くの国で

採用されている水管理の規制がILBMの概念に沿っていると述べました。また各国の代表からは気候変動、水に関連した自然災害(洪水や干ばつ)発生の増加、産業部門間の競争拡大等に重点をおいた発言も多くあり、ILBMは柔軟で新しい気候変動対策を講じる水管理の基礎となること、淡水が国際的議論の中心的なテーマであることに合意しました。最後にSzöllösi-Nagy議長が科学的な考え方を一般市民に浸透させることの大切さを強調し、技術は新たな道を開いて社会的なコミュニケーションや参加・協力の機会を生み出すものであると述べ、フォーラムを閉会しました。



* András Szöllösi-Nagy教授は2014年11月7日をもってUNESCO-IHEを退職されました。

トラジメノ湖と琵琶湖をつないだ地域政策フォーラム

ペルージャから20キロほど離れたところに、今回の世界湖沼会議のもう一つの舞台となったトラジメノ湖*があります。このトラジメノ湖と琵琶湖でそれぞれ活動する市民団体関係者等が交流を深めたサイドイベント、地域政策フォーラムが開催されました。トラジメノ湖では琵琶湖のえり漁に似た伝統漁法が今も受け継がれており、その用法等について述べた地元漁業組合代表者の発言に日本人出席者の関心が集まりました。一方、琵琶湖周辺のエコツーリズムのユニークな例として紹介された、生活用水として使われる湧水が集落をめぐる滋賀県高島市針江地区^かの川^{ばな}端や、市民が主体となった琵琶湖流域のホテルの保全、川の清掃、水質モニタリング等の活動にも注目が集まりました。最後に、滋賀県内学術機関のハートウェア・プロジェクトチームより琵琶湖畔の60年前の暮らしを描いた屏風絵が紹介され、会場から大きな反響を得ていました。盛況をお

さめた同フォーラム終了後には、参加者の継続した交流を望む声が多数寄せられました。



*トラジメノ湖の詳細については、前号8ページの特集記事にて紹介しております。

TWAP 公開フォーラム

ILECは国際環境基金（GEF）プロジェクトの一つである国際越境水域評価プログラム（TWAP）の湖沼部門を担当しています。本プロジェクトは5つの主要な越境水域（河川、湖沼、地下水、沿岸生態系、海洋）を地球規模で評価する初めてのGEFプロジェクトです（詳細はwww.geftwap.orgを参照）。第15回世界湖沼会議の場を利用して開催されたTWAP公開フォーラムには約40名が参加し、本プロジェクトの取組を各国の専門家に知らしめるとともに、国際的な視点から意見を求める重要な機会となりました。

本フォーラムでは、湖沼グループのプロジェクトマネージャーの一人であるWalter Rast教授がプロジェクトの概要と目的を紹介するとともに、湖沼グループの主要な活動として専門家との協議や会合の討議内容、プロジェクトで実施した164の越境湖沼流域の画定プロセス、GIS分析の基礎となる地球規模と地域ごとの国際的な水システムや湖沼のGIS地図情報の作成等について説明しました。さらに、湖沼流域を評価するための指標、越境湖沼流域に関する地球規模のデータ不足の

問題、越境湖沼流域と他の水システムに関連して「優先順位」の考え方を再検討する必要性等を議論しました。

もう一人のプロジェクトマネージャーである中村正久教授は、62の主要湖沼を含む206の全ての対象越境湖沼に関する包括的なデータファイルを示し、湖沼グループの評価の枠組みと取組を紹介しました。さらに、4つの課題（集水域の乱れ、汚染、水資源開発、生物相）とそれらを引き起こしている23の要因についてGISを用いてさまざまな角度から検討することにより、各対象湖沼流域の2つの主要な脅威（人間に必要な水の確保、生物多様性）を評価し、対処すべき湖沼の優先順位をつけるシナリオ分析手法を紹介しました。この評価には、これら2つの脅威を地球規模で評価したNature誌の論文の補足情報（www.nature.com/articles/nature09440）を用いています。TWAPにおける湖沼流域の総合的なシナリオ分析には、湖沼流域に関する他のデータや文献情報も活用され、滋賀大学とILECが共同開発した知識ベース「LAKES

（Learning Acceleration and Knowledge Enhancement System）」が重要な役割を果たしています。

さらに、中村教授は「生態系サービス共有価値アセスメント（ES-SVA）」についても説明しました。これは、流域がもたらす生態系サービスについて、社会における根本的な原因（Driver）、問題の直接的な原因となる圧力（Pressure）、それによって生じる影響（Impact/Impairment）、影響を受けて変化した流域の状態（State）、それに対する社会側の対策や政策（Response）を一連の質問で評価するものです。このアセスメントはアフリカと南米のいくつかの湖沼を対象に既に実施され、その結果の一部は世界湖沼会議の別のセッションで発表されました。アセスメントはプロジェクトの期間だけでなく、その後も継続して実施される予定であり、湖沼の解析にも利用されます。また、会期中は一連の地域専門家会合も開催されたほか、会議に参加した専門家に対してES-SVA調査、優先順位解析に用いる23のDriverの重みづけに関する調査が実施されました。

東アフリカとポストAFSAN ILBM

ILECは、「アフリカにおける水環境改善事業（AFSAN事業）」を環境省から受託し、2009年度から2011年度にかけて東アフリカの湖沼流域の衛星と水環境を改善すべく滋賀大学環境総合研究センター（RCSE-SU）と協同でILBMプラットフォームプロセスの立ち上げを支援しました。対象となったのは、ケニアにあるビクトリア湖ニヤンザ湾とナクル湖、そしてジンバブエのチベロ湖です。

このプロジェクトのフォローアップとして東アフリカにおけるILBMの更なる推進を図るべく開かれたのが、第15回世界湖沼会議の特別セッション「東アフリカとポストAFSAN ILBM」です。地球環境基金の支援を得てペルージャ大学で開催した本セッションでは、ケニアの環境・水・天然資源省、ナクルカウンティ政府、OSIENALA、FlamingoNetから専門家を招き、東アフリカの湖沼流域で実施した生態系サービス共有価値アセスメント（ES-

SVA）調査の結果を共有してILBMと越境協力について議論しました。



有毒シアノバクテリア(藍藻): 環境科学と健康科学を連携するツール

サンドラ・M.F.O.アゼベド (ブラジル)

シアノバクテリア(藍藻)には、非常に多様な原核光合成微生物が含まれています。その多くは遠海の水生生態系の環境で成長する植物プランクトンですが、その中にはシアノトキシンや二次代謝物を生成するものもいます。水域の富栄養化や気候変動によって、このバクテリアの世界的な異常発生は増える一方です。それは、自然環境や人間の健康に対する脅威であるだけでなく、環境や公衆衛生上のリスクによる景観や経済的な損失をもたらしています。シアノトキシンの危険性は一世紀以上にわたって認識されてきました。これまでに多数の家畜、野生生物、人間の中毒事例が報告されています。環境毒性に関する研究によってシアノバクテリア代謝物の毒性とそれらが水生生態系に及ぼす影響に関する調査が進み、シアノトキシンが細胞や組織に与える影響について多くのことがわかっています。その一方、水生環境におけるこうした毒素の影響については、まだほとんど解明されていません。

しかしながら、過去数十年間で特にゲノムとプロテオミクスの研究分野において、いくつかの重要な進展がありました。異常発生したシアノバクテリアが毒性を有するのは、毒性株があるためだということがわかってき

ました。自然界には毒性のある株とない株が存在しています。前者でも毒素の含有量はさまざまなので、シアノトキシンの生成量は毒素を生産するクローンの生成量によって概ね決定されます。さらにここ数年で研究手法が発達し、自然水域におけるクローンまたはその下位種の生成メカニズムが明らかになりつつあります。現時点で言えることは、シアノバクテリアのクローンの生成、したがってシアノトキシンの生成は非常に複雑であるということです。クローン生成メカニズムに関する研究成果の発表はまだわずかに留まり、そのメカニズムは十分明らかにされているとは言えません。光が駆動因子になっていることが示されましたが、それはまだ二対の株についての結果でしかありません。天然の水域では、栄養分の入手、温度、捕食耐性、越冬能力等他の多くの要因も重要です。また、シアノトキシンの役割は依然として解明されていません。さまざまな種や株にある毒性の進化はほとんどわかっておらず、例えば、まったく異なる分類の株が同一の毒素を生成することがある一方で、非常に密接に関連した株が異なる毒素を生成することもあるのです。

ブラジルでは、シアノバクテリアの毒性に関する研究が1990年代に始ま



りました。しかし、この問題が公衆衛生にとって重要であると考えられるようになったのは、1996年にある慢性腎不全の患者が中毒に陥ったからのことです。30年近くが経過した今、有毒シアノバクテリア異常発生の原因と結果に関わるほぼすべての側面について研究がなされています。これまで、公共水道の管理と処理、シアノバクテリアの成長と異常発生に関わる環境問題、シアノトキシンの毒性や生態毒性等については大きな進展がみられましたが、シアノトキシンの生成を制御するメカニズムとその水生生物への影響を理解するための細胞・分子レベルでの研究はほとんど進んでいません。

ILECが推進する統合的湖沼流域管理(ILBM)は、広範囲の分野にわたる有毒シアノバクテリアの研究や管理を集中的に進めることに適した概念で、有毒シアノバクテリアの異常発生を防止・軽減するために、あらゆる関係者がその原因と結果の議論に参加することを可能にしてくれるものです。





ILECの科学ジャーナル

Lakes & Reservoirs: Research and Management 第19巻の目次

第1号 (2014年3月発行)

Page	論文タイトル	第1著者
1	カリバ湖 (ジンバブエ) の <i>Kapenta</i> (イワシの一種) 魚の管理における俗説と実態	Kefasi Nyikahadzoi
11	地勢学的な閉鎖水域、バリング湖 (ケニア) の淡水集水域における栄養分および他の物理化学的な成分の地域分布	Henry Ouma
24	リモートセンシング技術を用いたリン化合物の湖内分布の決定	Sheela Albert Moses
37	水位の高い時期の群生水生植物間の距離はそれらの類似性を決める重要な要素となるか?	Jose de Ribamar
46	ナイバシャ湖 (ケニア) における <i>Cyprinus carpio</i> (鯉の一種) の皮膚やえらに発生したバクテリアとその発生量: 公衆衛生や魚の品質への影響	Oscar O. Donde
56	熱帯魚の群生集団における植物連鎖の類型とその多様性	Upali S. Amarasinghe
70	第15回世界湖沼会議「湖沼は地球の鏡」の第1回案内	

第2号 (2014年6月発行)

Page	論文タイトル	第1著者
73	第15回世界湖沼会議の開催迫る	Walter Rast
74	南米パタゴニアの貯水池における固有魚種、導入された野生のサケ、および養殖場から抜け出したニジマスの生存量	Victor Cussac
86	一回の漁における漁獲高や一定地域における収穫量を漁場の乱獲度の指標とする試み: 西アフリカの貯水池への適用	Justin Kantoussan
98	植物プランクトンの吸収スペクトルを用いた4つの温帯湖沼の識別	David Kalenak
118	大きくて浅い湖沼の土砂移動に対する風波の影響	Zhen-Gang
130	マレーシアの湖沼: 水質、富栄養化の状態と湖の管理	Zati Sharip
142	カラウン貯水池 (レバノン) における初めての生態系アセスメント	Ali Fadel
159	第15回世界湖沼会議「湖沼は地球の鏡」の第2回案内	

第3号 (2014年9月発行)

Page	論文タイトル	第1著者
161	クリシュナギリ貯水池 (インド) における土砂堆積と湖内のリン負荷	Elangovan Arunbabu
174	要因分析によるオロビ貯水池 (ガーナ) の評価	Osei Akoto
183	スリランカの非通年貯水池において養殖漁業計画を立案するための地理情報システムおよびリモートセンシング技術の利用	W. M. Hiranya Kelum Wijenayake
192	図表で見るビクトリア湖流域の伝統漁業や商業漁業で使用される漁具や漁法	Daniel O. Okeyo
206	ビクトリア湖ウイナム湾の商業漁業における漁獲高の減少: ケニアの養殖漁業の再構築の重要性	Solomon Omwoma
211	貯水池管理における相互に依存する経済と水文の統合	Deepayan Debnath
225	ダム建設に伴う影響の軽減と強制移住させられた人々の生活改善 (ベトナム中部 クアンナム省の取組)	Jane Singer

第4号 (2014年12月発行)

Page	論文タイトル	第1著者
237	第15回世界湖沼会議を振り返って	Walter Rast
240	バリング湖 (ケニア) のシアノバクテリアの増殖活動に及ぼす環境因子の影響	Casianes O. Olilo
255	統合的湖沼流域管理を用いた利害関係者によるさまざまな集水域管理手法の評価	B. A. Saunders
269	湖の氷の成長を予測する数理学的手法	Horacio Toniolo
280	小さな湿地 (ムボロゴマ湿地) の漁業に及ぼす土地利用の影響とその社会経済的な考察	Grace A. Ssanyu
293	熱帯地域の大規模貯水池における特定の気候変動や土地利用変化に対する水質指標の感応性	Gustavious P. Williams
306	多変量解析による熱帯沿岸湖沼の堆積土砂の分析	Sheela A. M.
319	論文審査委員一覧	

元JICA研修生からの便り

スハス・コブラガデ（インド）



スハス・コブラガデ博士は、国際協力機構（JICA）とILECが2013年に日本で実施した集団研修「湖沼環境保全のための統合的流域管理」を受講しました。博士はインド北部の都市、ルールキーにある国立水文研究所（NIH）で湖沼水門学を専門とする科学者として勤務しているほか、湖沼保全に関するさまざまな短期研修を開催しています。また、現在は同国チャンディーガルにあるスクナ湖の詳しい水門学的調査を実施中です。連絡先はsuhass@nih.ernet.inです。

インドの湖沼は、過去数十年間で集水域における非科学的な管理、都市化、身勝手な人間活動によって量的にも質的にも悪化してきました。そのうち、都市湖沼の多くでは堆泥、有機性汚濁、富栄養化、流入量の減少等の問題が見られます。このため近年インドでは、湖沼の保全と適切な管理が社会経済的に大きな意義があると捉えられるようになり、環境森林省が国家湖沼保全プログラム（NLCP）を立ち上げました。水資源省傘下のNIHは、水文学と水資源の分野ではインドを代表する研究機関であり、貯水槽やため池に加え、多くの湖沼（ダル湖、ナイニタル湖、ポパール湖、ピコラ湖、マンザー湖、レスカ湖、バラパニ湖等）について研究をし、現場技術者、計画立案者、研究者とともに長年培ってきた技術的ノウハウを共有するため「湖沼の保全と管理」をテーマとする研修を定期的実施してきました。

しかし、私は2013年にILECの統合的湖沼流域管理(ILBM)研修を受講したことで「自然科学」単独では湖沼保全に関する問題を解決できないことを学び、実感しました。持続

可能な保全と管理の実現には、(自然科学以外の要素も内包する) ILBM的アプローチが最も重要です。最近インドでは統合的水資源管理 (IWRM) を巡る議論が始まりましたが、この、いわゆる「IWRM的アプローチ」には湖沼のような「静水」の概念が抜け落ちており、実質的には河川のみを対象とする流域管理になっています。このため、私は2014年より研修名を「湖沼管理保全のためのILBMアプローチ」に変更し、このテーマに基づく最初の研修を2014年11月10～14日にNIHで実施しました。インド全国から現場技術者、大学教員、研究者、NPO関係者等延べ22名が受講しましたが、残念なことに湖沼保全プログラムの下で事業を進める環境森林省や関連機関からの参加はありませんでした。NIHにとってILBMを取り扱う初めての研修ということもあり、カリキュラムにはILBMの概念を理論的に紹介する講義と、その概念がどのように適用されるのか示すスクナ湖の事例研究を導入しました。これらの講義は私が担当し、IWRMとの比較、静水と動水の環境の違い、ガバナンスの6本柱、ILBMプラットフォームプロセス、ハートウェア等を簡潔に紹介しました。そのほかの講義では、水文学や事例研究に焦点を置きました。

研修後、ILBMの概念は多くの受講者から好意的に受けとめられ、特に「ハートウェア」という用語とその考え方は高く評価されました。ILBMについて、もっと詳しい講義を研修に取り入れてほしいという声も寄せられました。次回からはILBMの講義を増やす計画ですが、そこにはレイクブリーフ（湖沼概要書）、ILBMの理念と原則、ガバナンスの6本柱、インドのハートウェアの経験を含める考えです。インドでILBMが社会に浸透するには不断の努力が求められています。



訃報

ILEC顧問（初代理事長）山崎圭氏 逝去

ILECの顧問（初代理事長）、山崎圭氏が2014年9月8日に亡くなりました。山崎氏は、環境庁（現環境省）環境事務次官を務められた後、ILEC設立当初（1987年）より理事長として18年間就任され、その後も顧問として世界の湖沼環境保全にご尽力をいただきました。享年84歳。



ILECでのインターンシップを終えて

ILECでは2014年9月から12月にかけて2名のインターンを受け入れました。今回、お二人より体験談を寄稿いただきました。

ILECでのインターンシップ: 学びと経験が出会う場所

シータ・エカニジャティ (インドネシア)

ILECでの3ヶ月間は、知識を得、職業体験をし、対人関係を学ぶ機会として私の期待をはるかに上回るものとなりました。そのハイライトは、統合的湖沼流域管理 (ILBM) をテーマとする研修のお手伝いをしたことです。この研修を通じて、世界の湖沼の現状や世界の湖沼がさらされている脅威について知ることができました。また、このような脅威に対する湖沼の反応を評価し健全な湖沼を取り戻すために、ILECが広範に展開している方法論の概要を学びました。次回の世界湖沼会議は2016年に私の母国インドネシアで開催されると伺い、うれしく思っています。ILBMの導入により、インドネシアの湖沼がより適切に管理され持続的に保全されることを願っています。



ILECでのインターンシップを通じて気づいたこと

ニラ・シャルマ (ネパール)

私は、インターンとして勤務したことでILECが持続可能な湖沼管理に向けて献身的に取り組む姿を目のあたりにしました。また、JICA研修員たちと一緒にILBM研修に参加するという素晴らしい機会を得ました。特に印象に残っているのは、ガバナンスの6本柱を合わせることによって、琵琶湖がいかにILBMの際だった成功例としてその地位を占めているのかという点です。そして、1970年代の「石けん運動」に始まる琵琶湖流域住民の環境への意識の高さには感心しました。私の出身国ネパールには豊かな淡水湖の水源がありますが、その保全においてはさまざまな困難を抱えています。湖沼の保全と管理には、多くの利害関係者が参加することが重要であると思います。ネパールは、ILBM研修にもっと参加する機会を求めべきでしょう。



ILECの活動が 放送されました

ILECの活動が以下の地方テレビ番組で取り上げられました。



JICA研修「湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理」のNHKによる取材の様子

トピック	放送日	時間帯	番組		放送地域	放送局
			題名	種類		
第15回 世界湖沼会議	2014年9月9日	17:45-18:10	キラりん滋賀	ニュース	滋賀県	BBC*
	2014年9月21日	18:15-18:29	湖との絆 ~第15回世界湖沼会議~	ドキュメンタリー	滋賀県	BBC*
						
	2014年10月2日	18:10-19:00	おうみ発 610	ニュース	滋賀県	NHK
	2015年3月8日、15日	8:45-9:00	比叡の光	宗教	京都府、滋賀県	KBS**
JICA研修	2014年11月14日	19:30-19:55	かんさい熱視線	ドキュメンタリー	関西地方	NHK
	2014年11月20日	18:10-19:00	おうみ発 610	ニュース	滋賀県	NHK

*BBC：びわ湖放送 / **KBS：京都放送

浜中理事長が「瑞宝重光章」を受章

ILECの浜中裕徳 理事長は、2014年11月3日、内閣府より国家又は公共に対し功労のある方、公務等に長年にわたり従事し成績を挙げた方に贈られる「瑞宝重光章」を受章しました。

ILECの活動概要 (2014年7月～2015年3月)

2014年

●7月

- 15日 インドネシア共和国パプア州ジャヤプラ県知事等がILECを訪問
- 22日 フィリピンより、JICA草の根技術協力事業研修チームがILECを訪問

●8月

- 2～5日 JICAイラン国別研修「琵琶湖における県の政策と総合湿原保全の歴史」を実施【写真①】
- 29日 中国湖南省より、湖南省訪日研修生がILECを訪問

●9月

- 1～5日 第15回世界湖沼会議、ILEC科学委員会総会、TWAP専門家会議、東アフリカILBM特別セッションを開催（パルージャ）
- 16日 京都大学大学院地球環境学会よりインドネシアのインターン生を受入（12/15迄）
- 17日 大阪大学大学院工学研究科で修士号を取得したネパールのインターン生を受入（12/15迄）

●10月

- 3日 JICA委託研修第9回「湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理」開講（11/28終了）【写真②】

- 27日 マレーシア国立水理学研究所（NAHRIM）の派遣団がILECを訪問

●11月

- 10～14日 TWAP湖沼グループ技術検討会をILECと滋賀大学で開催（滋賀県）

2015年

●1月

- 10～17日 TWAP湖沼グループ総括会合をILECと滋賀大学で開催（滋賀県）
- 13日 大邱慶北研究院（韓国）との第7回世界水フォーラム準備協議をILECで開催

●2月

- 11～12日 大邱慶北研究院での第7回世界水フォーラム現地準備会合に出席（大邱）

●3月

- 2～3日 TWAP 運営委員会に出席（パリ）
- 3～5日 東アフリカILBM専門家会合を開催（ナクル）【写真③】
- 7～8日 SATOYAMAイニシアティブ推進ネットワークセミナー・現地視察に参加（福井県）



写真①



写真②



写真③

寄付・賛助会員入会のご案内

ILECは1986年の設立以来、国連環境計画(UNEP)をはじめとする国内外の関係機関と連携し、世界の湖沼環境保全を目指した調査、研究、および世界湖沼会議の開催等の国際協力活動を行っています。こうした活動へのご理解をいただき、ご支援を賜りたく、当財団では寄付のご協力および賛助会員へのご入会をお願いしております。なお、寄付金には税制上の優遇措置が適応されます。詳しくはwww.ilec.or.jp/jp/advertiseをご覧ください。

寄付・賛助会員についてのお問い合わせ

公益財団法人 国際湖沼環境委員会(ILEC)担当 黒崎
E-mail: mkurosaki@ilec.or.jp / Tel: 077-568-4567

ご寄付・ご協力ありがとうございます！

ILECの活動にご賛同いただき、毎年、継続的にご協力をいただいている企業・団体様をご紹介します。この場をお借りし改めて感謝の意を表しますとともに、頂戴いたしました善意を世界の湖沼環境保全につなげてまいります。綾羽株式会社、近畿労働金庫、湖東信用金庫、滋賀中央信用金庫、株式会社セディナ、長浜信用金庫（敬称略、五十音順）

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)



〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
— 事務局 — Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

*本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。